山とスポーツクライミング情報誌

登山月報

JMSCA 登山月報　第655号　令和５年10月15日発行

「秋日・鉄山から望む、沼の平と磐梯山」写真撮影：福島県山岳・スポーツクライミング連盟　理事　指導委員長　七宮 勝広

No.655

第３回ユースフューチャーカップ開催 …… 2
2023山岳レスキュー講習会（無雪期・西部地区）報告 …… 4
Enjoy Climbing …… 5
和歌山県山岳連盟自然保護委員会のSDGsな活動 …… 7
第20回 山岳遭難事故調査報告書 その３ …… 8
JMSCA、寄贈図書、表紙のことば …… 11

第３回ユースフューチャーカップ開催

９月16,17日の土日二日間、鉾田市生涯学習館スポーツクライミングセンターにおいて、ユースＣ（2010年、2011年生まれ）とユースＤ（2012年、2013年生まれ）を対象とした第３回ユースフューチャーカップがボルダー１種目で開催されました。

この大会は、従来、ジュニア、ユースＡ、ユースＢ、ユースＣの４カテゴリーを対象として実施されていたユース選手権（リード、ボルダー）の出場人数が大会運営の限界を超えるようになったため、ワールドユースやアジアユース等の国際大会に出場できないユースＣとユースＤを対象に、別の大会として実施することとなり、第１回と第２回大会はリードとボルダーの２種目で実施されました。

第１回大会には約250人が出場し、２種目を１日ずつに分けて実施しましたが、早朝から夜遅くまで長時間となり、運営上もかなり困難な状況になったため、第２回大会では参加定員を絞ったところ、申し込み開始後すぐに定員に達して出場できない選手が多数いたため、今年は、希望者が全員出場できることを優先してボルダー１種目での開催となり、この大会を目標に一年間リードの練習を重ねてきた子供たちの期待には添えない形になりましたが、全国から集まった238人の選手たちはボルダーの８つの課題に果敢に挑みました。

１日目に行われた男子では、41人が出場したユースＤで優勝者は７完登で１課題も完登できなかった選手が11人、69人が出場したユースＣも優勝者は７完登で１課題も完登できなかった選手が23人という結果でした。２日目に行われた女子では、44人が出場したユースＤは優勝者が５完登で全員が第１、第２の２課題を完登、69人が出場したユースＣでは優勝者が４完登で全員が第１課題を完登しました。全国からの参加者のレベルが多様な上にコンテスト方式で決勝がないこともあり、ルートセッターの課題設定の苦労が伺えました。また、コンテスト方式のため易しめの課題には長蛇の列ができ、トライできるまでにかなりの時間を要し、並ぶ順番を間違えると登れそうな課題に一度もトライできないまま終わった選手もいたようです。それらを含めてコンペ経験の少ない選手にとっては貴重な経験になったことと思います。

ボルダー１種目にしたことで、申込者全員を受け入れることができると共に時間的な余裕が生まれ、各カテゴリーの競技終了と表彰式の間の時間に初めて対面での研修の時間を設けることができ、アスリートとして身につけるべき事柄についての強化委員会委員からの説明の後に、アスリート委員会委員の日本代表選手が子供たちからの質問に答える時間もとることができました。質疑の中で「オリンピックに出場するのにどんなことが必要だと思うか？」の問いかけに対して「成績だけでなくクライミングを楽しむこと」と答えていたのが心に残りました。参加した子供たちが競技ルールやマナー、技術や体力を身につけると共に周囲の人たちへの感謝の念を忘れず、クライミングを楽しみながらアスリートとしても人間としても成長して心豊かな人生を歩んでいくことを願わずにはいられません。

この大会の名称は、ある関係者の発想をヒントに提案したものが採用されたのですが、文字通り若い選手たちが将来のアスリートとして健全に成長していくために必要な様々な要素を学べる場として今後も継続、発展していくことが望まれます。

今回は、かつて自分が部活顧問をしていた時の部員で、高３の時に全国大会で優勝して出場したアジアユースや、その後も国体などで長く活躍した女性の息子さんが初めて出場されていて、そういう時代になったのだと感慨深いものがありました。私も同行した北京でのアジアユースの代表選手たちは第１次ユース世代ともいうべきメンバーで、その後ワールドカップで活躍した選手も多く、今は国際ルートセッターとして活躍中の人や、地方でクライミングジムを経営しながらクライミングの普及や選手育成に関わっている人もいます。

競技の発展には、選手経験者がコーチやトレーナー、ルートセッター、審判、大会運営スタッフ、あるいは保護者としてサポートしていく体制が持続的に構築されることが不可欠と思いますが、その時代が始まりつつあると感じます。

今年はワールドカップ初出場の選手がボルダー、リードの２種目共に年間王者になったり、ワールドカップ決勝進出者の大半を日本選手が占めるなど、日本の強さには目を見張るものがありますが、今回の大会参加者が国際大会に出場する頃にはさらなる発展が期待されます。

国内大会主催の主体となるＪＭＳＣＡの今の厳しい状況を打開するにはＪＭＳＣＡ関係者全体の協力が必要ですが、その中でも選手経験者を初めとするスポーツクライミングを愛する人たちの熱意と協力が、今後のさらなる競技の発展には大きな力になることを大会を通してあらためて感じています。

来年以降もこの大会が、未来のアスリートの教育の場として継続、発展していくように皆様の一層のご協力をお願いいたします。

茨城県山岳連盟をはじめとする地元スタッフの皆様、そして鉾田市関係者の皆様には大変お世話になり、ありがとうございました。深く感謝申し上げます。

（大会副実行委員長　目次 俊雄）

■入賞者

ユースC	男子	1位	中田　岳	愛知県山岳連盟
		2位	齋木　猛斗	三重県山岳・スポーツクライミング連盟
		3位	古川　大智	兵庫県山岳連盟
	女子	1位	松浦　碧希	東京都山岳連盟
		2位	秋山明日葉	奈良県山岳連盟
		3位	西　美柚奈	大阪府山岳連盟
ユースD	男子	1位	上田　大志	山口県山岳・スポーツクライミング連盟
		2位	齋木　郁希	三重県山岳・スポーツクライミング連盟
		3位	秋山　千畝	東京都山岳連盟
	女子	1位	廣瀬　菫	
		2位	原　奈々瀬	栃木県山岳・スポーツクライミング連盟
		3位	高久　晴希	

フューチャーカップ 親子研修

今回で３回目の実施となるフューチャーカップですが、前年度まではコロナ対策やスケジュール等の関係で、親子対象の研修をオンライン形式で実施していましたが、本大会より参加選手および保護者・関係者と直接交流する機会を設けるため、対面での研修を行いました。

研修は各カテゴリーの競技終了後に実施し、選手・保護者向けに、ユース日本代表コーチの中貝次郎より「成長期のトレーニング等の留意点」について講義を行い、その後Ｑ＆Ａセッションの時間を設けて、講師と現役アスリートに直接質問や交流できる機会を設けました。現役アスリートには、１日目（９月16日）に渡部桂太選手、２日目（９月17日）に杉本怜選手が参加してくれました。

両日とも会場からはたくさんの質問が挙がり、代表コーチと日本代表選手（現役アスリート）の２つの視点から回答することができたことで、参加者の方々の理解がより深まったように感じました。

今回はスケジュールの関係で要点を絞った研修となりましたが、参加者の方々の反響を見て、次年度以降は、講師や現役選手たちとより交流ができるように工夫した大会にしていきたいと思います。

（ユース日本代表ヘッドコーチ　西谷 善子）

○講師からのコメント……　中貝次郎

今回初めて対面での研修会となり皆さんの様子がダイレクトに感じられたことがよかったです。

特に競技終了直後といったところで、選手・保護者のみなさま喜怒哀楽が色濃くある中お話を聞いていただいてありがとうございました。少しわかりづらいこともあったかと思いますが、なにか１つでも持ち帰っていただいて、今後のプラスになればと思います。

研修は「勝ちを急がず心身の成長に気を付けながら練習する！将来を見据えて」がテーマでした。

ユースＣＤの選手は成長期にあたります。競技の成績だけがすべてではなく、その取り組みが大切。なんといっても楽しめることがすべての源。そして健康が何よりということを、引き続き研修を通して伝えていければと思います。

また来年フューチャーカップで元気な姿を見るのを楽しみにしています。

研修の様子

○現役アスリートからのコメント……　杉本怜選手

私は今回ＹＦＣに講師として参加させていただきました。子供達からのたくさんの質問に対して受け答えしましたが、中にはメンタルのことに踏み込んだり、純粋な子供達だからこそ核心をついた質問を受け、私も様々なことを考えさせていただきました。これからも子供達が楽しく長くクライミングを続け、競技も楽しんでもらえるような場にＹＦＣが発展していけるようお手伝いしたいと思います。

○現役アスリートからのコメント……　渡部桂太選手

全国から２日間に渡り、約250人のユースＤ、ユースＣの選手が参加している様子を見て、非常に嬉しくなりました。

８課題全てをトライすることが出来なかった選手にとって、今回の経験を普段の練習に活かすにはあまりにも過酷な環境だったと思いますが、少ないトライで登り切るといった登る能力は勿論、並び方も一つの戦略なので、同世代と競うことの出来る貴重な大会を通して少しでも何かを掴んで次に繋げていってもらえると嬉しいです。

大会コンセプトや内容がより良いものになるように、私たちの世代も協力していければと思います。

○初めて参加された保護者の方からのコメント

大会の後の講習会では、素敵なお話を聞けて本当に良かったです。体の体格差がある、登りきる！のがなによりの練習。プロセスを重視。とにかく食べてしっかり睡眠などなど、とにかく新鮮でした。こういう講習会は初参加だったので、また機会がありましたら参加したいと思います。

公式な大会は初めてだらけでしたが、いい経験にもなり、来年の目標ともなりました。

選手とのQ&Aセッション

2023山岳レスキュー講習会（無雪期・西部地区）報告

遭難対策委員長　服巻 辰則

2023年9月22日（金）～24日（日）に富山県立山町の国立登山研修所にて、山岳レスキュー講習会（無雪期・西部地区）を開催した。直前までの猛暑から一転し、寒気が入り涼しい講習となった。

講習は、ファーストエイドや搬送・ビバークを中心としたクラス1、クライミングセルフレスキューの基礎から応用まで学ぶクラス2、クライミングレスキューの基礎技術習得者を対象としたシナリオシミュレーションを中心としたクラス3の三クラス体制を企画した。しかし、クラス3は締め切り2週間前までに応募が皆無であったことから、クラス3を廃止、クラス2の定員を増やして募集を行った。結果的にクラス1，2の両クラスとも定員には達しなかったものの、定員の八割程度の参加者を迎えて開催した。講習会参加者数は、クラス1（受講生12名）、クラス2（受講生16名）、講師・スタッフ等（17名）の計45名となった。

クラス1は、国際山岳看護師資格を有する遭難対策委員と登山医科学委員会から迎えた角田医師を中心に、山中でのファーストエイドを専門的に講習する機会とした。これに、ファーストエイドの知識を背景にした傷病者の搬送方法やビバークについても講習した。受講生に山岳救助に係る消防士も参加していたことから、救助側からの意見交換もあり充実した講習となった。

クラス2は、ロッククライミング中の事故に対するセルフレスキューについて、基本的に技術とシステムを理解することを目的とした。昨年までの最後のシナリオシミュレーションで使用する技術のみを段階的に指導するのではなく、汎用的な基本レスキュー技術をしっかり指導する方針として講習を行った。具体的には、ロープを使った懸垂下降と登り返し、引き降ろしと引き上げのそれぞれの個別技術とその切り替えについて講習した。これらの技術と自己脱出を含む荷重の移し替えができれば多くのクライミングセルフレスキューが行えるものと考えている。これらの基礎技術を徹底的に習得する講習プログラムとし、最終日には簡単なシナリオシミュレーションを行って、習熟度の確認を行った。

感想（クラス1・東京都　志村 将行）

夫婦でいつも登山をしていて、何回か遭難現場に居合わせてレスキュー要請や手助けをした経験がありました。当時はまだ何かできたのではと後悔の念もありましたが、今回の講習会を受講したことによりやれることが増えたように思えます。

今後は、バイスタンダーとして使命感を持って登山活動を夫婦でしていきたいと思います。

最後に、ご指導頂きました堀講師をはじめとした皆様、誠に有難う御座いました。

感想（クラス1・東京都　志村 恵理子）

夫婦で山が大好きで、頻繁に山に行くようになり、怪我をした人や滑落を目にする事が増えていました。また、沢や岩場にも行くようになり、夫や仲間に何かあった際に、何をしたら良いかわからない事を不安に思っていました。そんなタイミングでこの講習会の事を知り、夫婦で参加させていただきました。

私はとても緊張してしまう性格なのですが、講師の方々がとても優しくて質問もしやすく、どんな質問にも丁寧に答えてくだり、1つ1つ納得しながら進めていただけて、とても

勉強になりました。

夫婦で学べたことで、今後そういった現場に遭遇した時も、何か役に立てることがあると思いますし、夫婦のどちらかに何かがあった時にも出来ることがあると思います。

教えてくださったことを忘れてしまわないよう、反復して自分のものに出来るようにします。本当にありがとうございました。

感想（クラス２・富山県　山口 敏夫・ゆひな）

初めてＪＭＳＣＡ主催のレスキュー講習会（クラス２）に参加いたしました。講師、スタッフの方々の事前準備が素晴らしく行き届いており、受講者16名全員が各パートの課題に取り組む度に作業が滞らず進んでいくことに感銘をうけました。加えて、講師の方々からほぼマンツーマンでご指導頂ける環境でしたので、その場で色々なアドバイスを受け、分からない手順などを放置したままにせず学習することが出来ました。本当にありがとうございます。

講義の前半でリーダーレスキューに必要な技術を各パートで教えて頂き、後半はそのシミュレーションとして２人組でロープをつなぎ、クライミングからのレスキューという流れを実践しました。各パートの時には出来ていた動作もいざ通しでするとなると頭が真っ白になって苦労する部分が多々ありましたが、その都度、講師の方々から優しい助言が届き、パニックにならず練習出来ました。それと、救助の際に必要となるロープカットを経験させて頂けたのはとても良かったと感じています。万が一の時に経験しているのといないのとでは、対処の仕方も心構えも変わってくるはずです。

全国から集まった受講生の方々はみな、クライミングへの意欲が高く懸命に学ぼうとされており、とても刺激をうけました。和気あいあいと山やギアの話をしたのも楽しい時間でした。

今回の講習を通して学んだ事をしっかりと身に付けるために、復習と反復練習を続けていきます。自立した登山者を目指して！

＊

なお、本事業は、日本スポーツ振興センターのスポーツ振興くじ助成を受けて開催された。

Enjoy Climbing

パキスタン チャラクサ氷河クライミングツアー 2022④

佐藤裕介 記

ナイサブラック

１Ｐ目５.10（55ｍ）佐藤

スラブを弱点付きながらロープを伸ばす。ルートファインディング含め最初のピッチなので緊張した。

２Ｐ目５．９（60ｍ）佐藤

ハング際を左上してルンゼ状の緩傾斜帯からコルに出る。そこから５ｍほど登ってカンテの岩角＋カムでビレイ。

３Ｐ目５.10（40ｍ）佐藤

カンテ上を行こうとしたがプロテクション取れず少しクライムダウン。フェイスをちょっとしたランナウトに緊張しながら進む。カンテに出てビレイ。今日は３Ｐずつでリード役を交代なので、坂もっちゃんとバトンタッチ。

４Ｐ目５．９（40ｍ）坂本

カンテを左に回り込みカンテ上を行く。その先はプロテクションが取れないスラフェースになったので一旦ピッチを切った。

５Ｐ目５.10（50ｍ）坂本

10ｍ程プロテクションの取れないスラフェースを頑張って坂もっちゃんが登る。後半から容易なリッジ登り。６Ｐ目以降は50ｍロープ一本でコンテで行くことにした。ロープの中間に佐藤が入り数珠つなぎ状態でフォローする。最後のリード役ルー君の出番が無くなるの

で、この終了点でルー君とリード役を交代してピークまでルー君がトップを行く。

６Ｐ目５．６？（150ｍコンテ）田中

簡単だがスッパリと切れて高度感のあるリッジをコンテでトラバースする。素晴らしいロケーションだが天候急変でゴロゴロと雷が鳴りだしたので慌ただしくピークを目指す。３人での登頂写真を撮ろうとカメラを構えるとジージーと帯電する始末。

「恐ろしい。」早く脱出だ。

同ルート下降だからと途中で不要な防寒着などをデポしていたのだが大急ぎで逃げ帰ったら見逃し忘れてしまった。なんてこった。。。

＊

ＢＣ生活初日にチャラクサ氷河上流を偵察した際に見つけてすぐに今回の目標の一つに定めたピークがNafees'Capである。標高6000ｍほど。氷河からいきなり1000ｍ程の壁となっている素晴らしい岩壁状のピークである。Nicolas Favresse達が2008年にシングルプッシュ、オールフリーと言う素晴らしいスタイルで初登を決めている。

海外のビックウォールで数々の成果を上げているニコ達と言えどもシングルプッシュ＆オールフリーで登れる壁なら俺達でもエイドありで時間かければピークまで行けるんじゃないかなと言う、とんでもなく甘い見込みで目標決定した。真面目な遠征隊からは怒られそうだが、「おちゃらけチャラクサクライミングツアー隊」では大して事前の下調べもせずにここに来てしまった。

「普通のフリークライミングツアーでもトポとかで事前に下調べするでしょ！」と言うツッコミが入りそうだが。。。僕らは初登狙いとか「意義のあるトライをしなければ」と言う意識はなく、自分たちにとって楽しいクライミングになればそれで良しと思っていた。そう、最も大切なのは楽しい旅にすることである。氷河に入って良さげな壁を見つけたら登ろうという気楽なスタイルで旅に出たのだった。Ｋ７を登るためにＢＣをシェアしていたジャンボに「ナフィーズキャップは良い壁だよ。ラインは知らんがニコ達がアルパインスタイル、フリーで登ってたはずだ」と教えられ初めて存在を知った程に、我々はチャラクサ氷河について無知だった。偵察時もジャンボ隊にくっ付いて歩き、ナフィーズキャップの壁を教えてもらったのだった。

日本出国から帰国まで30日間と言う短い期間の中で、なんとか手の届きそうな大き目の壁として選んだのが、ナフィーズキャップであった。なんせ、カッコいいのですよ。

ナイサブラックから帰ってきた晩に早速ベースキャンプで作戦会議が行われた。実際はそんな大袈裟な物ではなく、晩飯食べながら「明日からどうするかねえ」と言うくらいの軽いノリの話し合いをした。

ＢＣ生活初日に散歩がてら氷河上から遠目に見て「カッコいいし立派だからあれ登ろうぜ」と佐藤がいきなり言い出した。そんないい加減さなので取り付きにさえ行っていないのだった。まあ、時間があまりに無くてその時間が取れなかったのだ。なんせここまでＢＣ入りしてから完全レストは１日だけしか無いと言う過密スケジュールだった。

まずは取り付きまでの偵察が当然必要であるが残された時間は10日間も無かった。最低限のレストや天候待ちも考えればかなりギリギリな日程である。

「一先ず、取り付きまで行ってそのまま、壁に取り付いてしまおう。フィックスしてＢＣまで戻ってきて体制整えてから再出発しようかね」と言う相変わらず行き当たりばっ旅的なノリで今後の計画が進められた。

１日は完全レストして翌日から用意＆出発を考えていたが雨が降って延期、結局ナイサブラックから３日間天候待ちして出発となった。

８月２日ＢＣ（７：40）－ナフィーズキャップ取付（11：30－13：30登攀開始）－登攀終了（17：30）－取付（19：00）－ＢＣ（22：00）

ＢＣで朝食を食べてから出発と言う舐めたタイムスケジュール。意外とナフィーズキャップ取り付きまでの工程が長く昼前にやっと取り付き付近の平地に到着した。やはり周辺全体の壁や山のスケールが壮大すぎて全部のスケール感が狂ってしまっている。「近くに見えるが実際は遠い」とか「小さな壁だと思ったのに全然デカかった」という事が頻発してしまった。他のメンバーは初めてなのでしょうがないとしても佐藤は「いったい何回高所登山に来ているんだ」と我ながらあきれる。ちなみにパキスタン遠征は今回で８回目でした。

準備を整えてアイゼンのまま一先ず、弱点となりそうなチムニーの取り付き目指した。今日は坂もっちゃんがリード役である。

各ピッチの詳細は下記を読んでもらいたい。思った以上にクライミングが難しく３Ｐ目を少し登って時間切れ。初日は全然ロープを伸ばせなかった。夜遅くに真っ暗のベースキャンプに辿り着いた。

またこのアプローチをしなければならないのかと考えるとウンザリする。ＢＣ起点に何度か出勤し、日帰りでロープフィックスを伸ばそうと思っていたが、次回は泊り道具も揃えて取付にＡＢＣを設置したいところである。

８月３日

今日はレスト＆次回の装備準備。既に残された時間は

４日間。４日目の夕方にはポーターがＢＣにやってきて、８月８日にＢＣ撤収下山開始である。「こんな余裕のない遠征は初めてだ」と言いつつ遠征ダルに湯を満たしてお風呂を楽しむ。20年の海外遠征で初のお風呂であった。これは最高だ。病みつきになりそう。

ナフィーズキャップから一旦BCに戻り、お風呂で疲れを癒す筆者

和歌山県山岳連盟自然保護委員会のSDGsな活動

和歌山県海草郡紀美野町と有田川町に跨がる生（お）石ヶ峰（いしがみね）（870ｍ）を主峰とする生石高原は県内北部の多くのところから望むことができ、やまぐに和歌山県においては珍しく山頂一帯にススキの原っぱが広がっています。晴れた日は眼下に和歌山市、紀伊水道、大阪平野、高野の山並み、和泉（いずみ）山脈（さんみゃく），遙か遠くに明石海峡を見ることができます。

生石高原にある笠石に腰をかけ四方の山並みを見渡した空海は、遙か山の向こうに平らな山を見つけ修験の地とし高野山を見いだしたと言われる処でもあります。

紀美野町小川の宮から３ルートの登山道があり、山頂周辺まで伸びる自動車道もあるため、ススキの広がる高原での風景が広く楽しまれています。地元公共団体の山の家だけではなく山岳関係者の山小屋もあり、手軽に登れてトレーニングになる山として山岳関係者には和泉山脈と並んで県内での人気の山です。

この山の自然が観光やスポーツ等で利用される以前には、地元の人々はここでススキ等を刈り、家の屋根の萱としてあるいは畑の肥料等として利用することで約125haに渡る高原の自然環境を保ってきました。ススキを畑の土中に入れ込むことでトマトの連作に効果かあるともいわれています。

1960年代以降から農業や生活等へのススキの利用という習慣が廃れていく中で、それでも何となく生石高原はススキの平原として保たれていたようです。「関西の軽井沢」というキャッチフレーズでの別荘開発もありましたが、県立自然公園という行政の規制や地元の人の強い思いが高原を別荘地にする乱開発から守りました。

とはいえ生活や農業利用等の減少、野焼きの規制、不在地権者の増大という状況下、今までの「何となく」ではススキの高原は保ちきれないのではないか、このままではイバラ等の生える荒れ山になるのではないか、という危惧が地元はじめ山岳関係者の間でも囁かれるようになりました。

2000年初頭から地元の有志の方や山小屋を有する山岳関係者が保存会を結成して協力し合う中で、春の彼岸前後に新たに高原の自然を保全するために山焼きが行なわれるようになりました。県立自然公園ということもあり県も保存会に補助するということで関わるようになり、地元や山岳関係の有志の動きが少しずつ広がり始めました。このことは改めて生石高原は『ススキの高原』と言うことが認識される契機となりました。

地元の消防団から始まり地主の方の山再生への理解、地元公共団体の理解と協力が広がりながら消防車の待機という行政の協力もある中、山焼きは毎年行われており、今では和歌山県の春の風物詩として定着しました。

自動車で手軽に登り自然に触れることができることから、山焼き・山開きの春先やススキの穂が開く秋には多くの観光客が訪れオーバーユースによる遊歩道の損傷がおきたりしますが、希少な植物の宝庫でもある生石ヶ峰の自然環境は、保存会を軸とした山岳関係者、地元の方々の日々の地道な道普請などの活動で今も守られ続けています。

（自然保護委員長　横出 俊一）

ススキの生石高原

生石高原山焼き

笠石直下の火上げ岩

20回目を迎えた山岳事故調査報告書

アウトドアは好きだが、登山には関心が向かない

余暇市場（図４）からみると、登山人口曲線が減少の一途であるのに対し、アウトドア関連製品の関心は高いことが分かる。

政府からの発信（コロナ政策）により、３密を避けるため、第２次キャンプブームが到来したが、2023年のコロナ緩和が始まり観光旅行に回帰した結果、キャンプブームは終息したと言われている。一方では、おうちキャンプ、ベランピング（自宅ベランダと高規格キャンプ）などに広がっている。

様々なアウトドア活動が展開され、人々はアウトドアでの活動が好きであるが、登山活動につながらない現状がある。

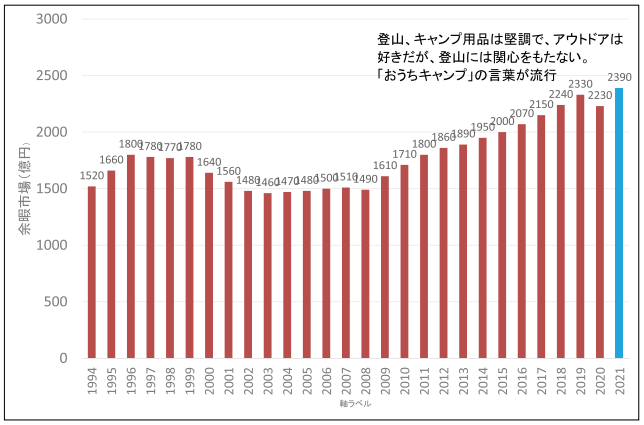


図４　余暇市場の推移（1994 － 2021）

2022年　警察庁の事故データ

本データは、毎年６月に公表される警察庁の事故統計を基に、再分析後・データ加工したものである。　なお、警察庁では2022年１月から12月までの調査結果としている。

１. 2022年山岳遭難事故の傾向

2022年の山岳遭難事故は、遭難者数で、前年度より431人急増し、2013年頃より急増してきた増加曲線に戻った（図５）。その結果、過去最高の遭難者数3506人、遭難発生件数3015件となった。

コロナから回復による、遭難者の急増であるが、70歳が主力となってきたとはいえ、未だに高齢化による遭難者数の減少が始まっていないことになる。

なお、負傷者1306、無事救出1873はいずれも過去最大であった。

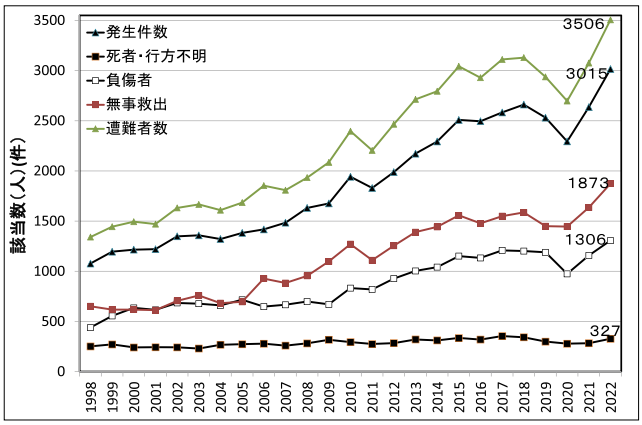


図５　2022年の山岳遭難事故発生状況

２. 事故者の年齢分布

図６より、事故者の年齢分布は前年度同様、70歳代（23.５％）をピークに分布した。典型的な事故者の高齢パターンは変わらず、70歳以上で30.５％、そして、60歳以上では半数（50.７％）を占める。

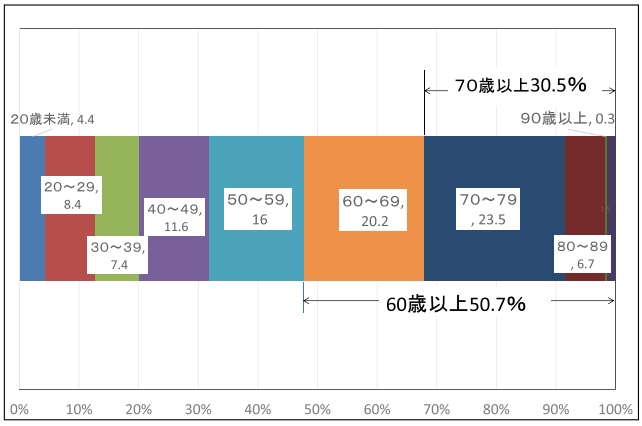


図６　事故者の年齢分布

事故者の世代別経年分布を図７に示す。今後の70歳台の曲線変化を60歳台曲線に類似するとして、推定すると、今後２～３年内に減少に転ずる。しかし、その減少分が、80歳台にすべてシフトするとは考えにくい。もし、80歳台が大きく増加するのなら、人類史上、経験したことがない超高齢化スポーツ時代に突き進むことになる。

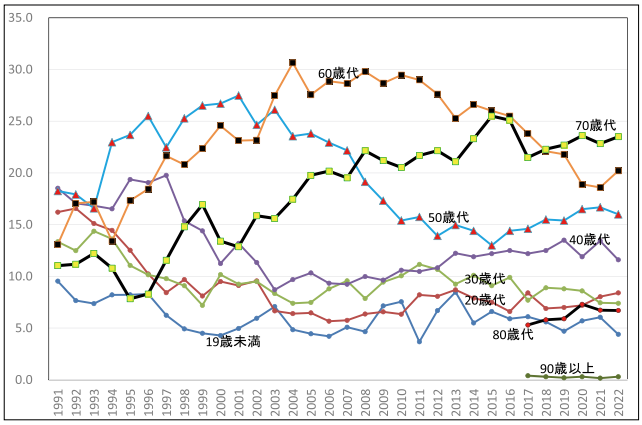


図７　各世代別経年変化

3. 登山目的別遭難者

登山者の行動意識は、コロナの影響を大きく受けたと考えている。遭難者数は、登山者数に反映されるとして、各項目の推移を見るために、コロナ前の事故最盛期2018（平成30年）を基準に各年に変化比率を求めたのが表6である。

「登山」目的に着目すると、2020年に最もコロナのダメージを受け、登山者数の減少を反映して、事故者が激減した。その後、2021年で少し増加し、2022年では最盛期を上回る1.15倍の2333人（表5）となった。

コロナ影響で増加した近場の登山としてのハイキング事故は現在も高い値を示している。一方、山菜採り、観光などは低いまま推移している。

項目	事故者数
登山	2333
ハイキング	248
スキー登山	38
沢登り	47
岩登り	60
山菜採り	319
渓流つり	47
作業	52
観光	70
写真撮影	28
山岳信仰	12
自然観賞	23
狩猟	11
その他	218
	3506

表5　2022年登山目的別遭難者

	2019	2020	2021	2022	
	R1／H30	R2／H30	R3／H30	R4／H30	
登山	0.94	0.83	0.99	1.15	
ハイキング	0.99	1.45	1.61	1.54	
スキー登山	1.30	0.80	0.89	0.70	
沢登り	1.21	0.89	1.06	1.00	
岩登り	1.13	1.26	1.35	1.94	
山菜採り	0.94	0.99	0.90	0.83	
渓流つり	1.64	1.60	1.48	1.88	
作業	0.84	0.88	1.07	1.21	
観光	0.44	0.23	0.35	0.50	
写真撮影	0.65	0.57	1.00	1.22	
山岳信仰	2.00	1.00	1.50	3.00	
自然観賞	0.92	1.69	1.38	1.77	
狩猟	1.80	1.20	2.60	2.20	
その他	0.98	0.70	0.81	1.25	
3129	2937	2697	3075	3506	事故者数
	コロナなし	コロナ影響大		回復期	

表6　コロナ前の最高値平成30年（2018）を基準とした4年間の変動比率（肌色は減少、水色は増加を示す）

4. 登山事故態様

図8より、「道迷い」の割合が前年度41.5％から36.5％に落ちているが、発生数は1280（前年1277）と変わらない。事故総数の伸び（参照図5）に対し、増加しなかったのは、山菜・茸採りの減少の影響と考えている。

他に、滑落（＋82）、転倒（＋92）、病気（＋67）、疲労（＋82）は前年より、それぞれ大きく増加している。

一方、例年ほとんど記録されない鉄砲水が増加した。沖縄名護市の大宜味村のター滝と源河川8月に発生した鉄砲水で、58人が取り残されたものである。ター滝では1名が亡くなっている。この事故が遭難者数を増加させた要因の一つになっている。

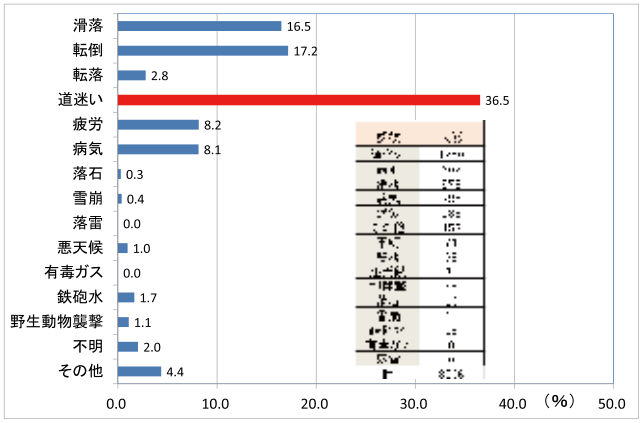


図8　事故態様

コロナの影響と県別事故発生件数

県別事故の発生件数を見ると、2020年、コロナが全国規模で急拡大し、登山活動が一斉に中止した時期より、コロナの影響はあるものの、コロナへの対応方法が浸透して、2021年、2022年（表7）と順次戻し増加していった。

そのプロセスを図9に示す2018年の最盛期を基準にした5つの登山県グラフで見ることができる。このグラフから急速な戻りが見られるが、未だ登山県では2018年レベルにまで戻していないことが分かる。一方、全国規模で表すと、図10のように、2018年レベルを遙かに超えた直線的な戻し曲線と増大曲線を描く。心的にはコロナからの束縛が薄れ、全国規模で登山活動が活発になったと思われるが、詳細は分からない。

都道府県	発生件数
1 長野県	207
2 [illegible]	205
3 北海道	192
4 山梨県	155
5 神奈川県	151
6 群馬県	130
7 岐阜県	128
8 静岡県	124
9 三重県	123
10 富山県	115
11 新潟県	114
12 埼玉県	87
13 栃木県	80
14 滋賀県	06
15 福島県	74
16 三重県	72
17 山形県	71
18 奈良県	60
19 鳥取県	57
20 愛媛県	57

表7　2022年の県別事故発生件数（20位まで）

図9　登山県における2018年の最盛期から、コロナによる発生件数の減少と回復過程

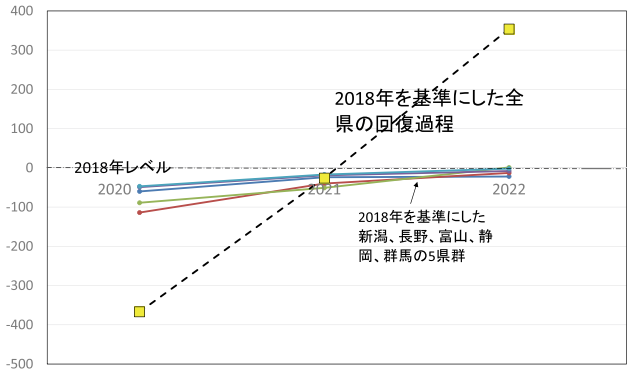


図10　上図の5県に加え、全県の回復過程を表示した。完全な直線増加している。

警察庁事故統計から見た登山事故史

1．警察の山岳事故統計の特徴

警察庁の山岳遭難事故統計は、長年、我が国の山岳遭難事故発生状況を知る上で最も重要な指標となってきた。

その特徴は、

(1)我が国山岳部で発生するすべての事故を取り扱っている。

(2)長期（1956年～現在）68年間にわたって実施されてきた。

問題点も多い。山岳事故は警察の出動を前提していること、事故データの不完全公開（例；男女別）、消防関係が保有する山岳事故データとの整合性がない、事故態様の判定は登山とは関係のない者の判断でなされ、出動した時点での状況判断で態様（原因）としている。

○警察が扱ってきた総データ数

警察統計は、当初「遭難対策中央研究協議会」より発表された。開始年は曖昧で、1956（昭和31）より入手できる。

当初、調査項目は「発生件数」で、「遭難者数」、「無事救出」はなかった。

警察が扱ってきた事故は、（入手年1956～現在）より

総「発生件数」	69,682件
総「死者行方不明」	14,806人
総「負傷者」	34,129人

「遭難者数」は「無事救出」の項目が追加される1976（昭和51年）より、総数が掴めるようになる。（1976～現在）

総「無事救出」	34,952人
総「遭難者数」	74,080人

○事故発生の経年変化から見た登山史

1956～2023における事故発生件数を基に図11を描いた。図中、1次～3次登山ブームは、羽根田、神谷、菊池、山形らによって異なる定義がなされている。その線引きは大きく異なる。大まかに分類すると、冒険登山～大衆登山～マスコミ情報登山時代へ変遷し、さらに高齢者登山時代に入った。

この大衆登山時代に入った頃、登山にのめり込んだ世代は「登山団塊世代」昭和15年～30年（1940－1955）生まれ」と呼称している。平成の登山ブームを作り出し、我が国の登山形態を大きく書き換えてきた世代である。世界的にも珍しい特異な高齢者登山時代を作り出している（図12）。間違いなく、この世代が後期高齢者に入り、やがて老齢化により消滅していくと、我が国の登山形態は根底から変わると予想している。

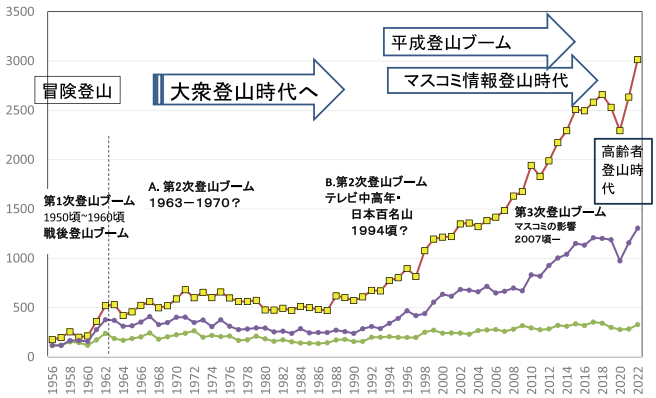


図11　事故発生の経年変化から見た登山史

高齢化する登山団塊世代：昭和15年～昭和30年（1940－1955）生まれ、図中黄色矢印は団塊の年齢幅を示す。

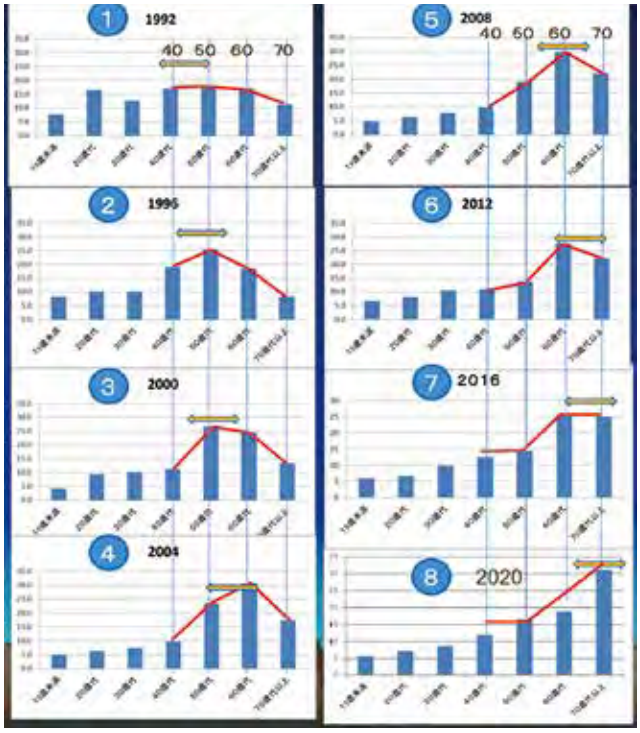


図12　左図は1992年から4年おきに2020年まで、事故年齢分布曲線のピークがシフトする様子を示した。

2．登山目的別事故の推移1998－2022（25年間）

登山目的には登山系と非登山系の項目が使用されてきた。

図13に25年間の経年変化を示す。使用項目は1997年より「沢登り」が加えられ、2015年よりゲレンデの「スキー」が加わる。

・登山系＝登山、ハイキング、スキー登山、沢登り、岩登り

・非登山系＝山菜採り、渓流つり、作業、観光、写真撮影、山岳信仰、自然観賞、狩猟、その他

登山系と非登山系の割合はおおよそ7：3であるが、25年間で、登山系が増加する傾向が見られる。なお、登山目的は通常、登山＋自然観賞＋写真撮影のように複数の目的が多いが、ここでは仕分けされていない。

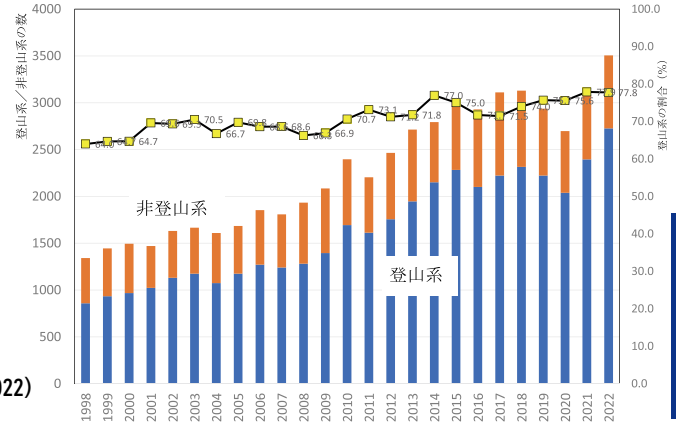


図13　登山系と非登山系の推移（1998 － 2022）

次回へ続く

JMSCA

令和５年度 第７回
ハイブリッド理事会報告

○**日　時**：令和５年８月10日（木）
14：05 ～ 19：25
○**場　所**：ＪＳＯＳビル３Ｆ会議室１と
Webのハイブリッド会議
○**出席者**：丸会長、蛭田、飛松、吉田、山本各副会長、小野寺専務理事、古賀、濱田、赤尾、町田、栗田、望月、安井各常務理事、佐藤、樋口、中島、杉本、西谷、畑中、平田、小田部、前田、野村、小高、中橋各理事、古屋、佐久間各監事
オブザーバー：百瀬競技委員長
○欠　席：小日向理事、水村理事、山口理事

１．開　会

２．丸会長挨拶

資金繰りについては、まだ先が見えない状況であるが、世界選手権での日本選手の活躍のニュースや、高校総体では360名の参加を得て、明日最終日を迎える状況になっており、皆さんのご協力に感謝したいと思います。今後の打開策を考えつつアーバンスポーツについても後ほど報告したいのでよろしくお願いします。

３．会議成立状況報告

理事数29名中26名出席、監事数２名中２名出席（定款第33条、定足数＝14名（１/２超、決議は出席理事の過半数をもって行う）

４．議長選出

丸会長が議長を務める（定款第32条）。

５．議事録署名人

会長及び監事（定款第34条）

６．議　題（注. 審議順に記載）

議案第１号　第６回（７月実施）理事会の議事録の承認について

第６議案について反対者数が３名だったが１名が特定できず、２名反対に変更したい。反対０名、全員賛成で承認された。

議案第２号　新規委員会提案と各理事担務について

丸会長が、配布資料を基に説明した。

新設提案の３委員会と、予算委員会、財務委員会について状況の説明がされた。

ＪＢＳ：10月開講、前期とほぼ同額の予算（3000万円強の半分）は確保済。西谷理事担当。

ＬＧＢＴＱ：相談できる窓口を設定すること等を検討。

パラクライミング：以前の協会との関係から設置したい。

上記提案に対する質疑応答、および意見が出たのちに、次の条件を付して、採決を取り承認された。

- 予算委員会、財務委員会については保留
- ３つの委員会新設について練り直し
- 副会長担務は各委員会に属さないという部分は削除。

賛成24名、反対０名、棄権１名（濱田常務理事）

議案第３号　事業再検討について

町田ＳＣ部長が現状について口頭で説明した。

競技：ＹＦＣまでを執行するとし、その後の４つの競技会の全体支出は6500万円が必要だが、2000万円強までしか確保できていない。やめれば違約金の支出も発生するので実施する方向で考えている。

強化：世界選手権まで執行は終了しており、残り７つの大会等で1400万円必要。

- ＳＣ部全体の予算精度を高める必要あり。
- 協賛金をどう配布するか検討したい。

その後、以下の補足意見が出された。

- 財務委員会で試算した結果では、ＹＦＣ以降の競技をすべてやめた場合でも3000万円の赤字となっている。今後支出できる金額とも、大きく数字の乖離があり、その詳細は別途確認が必要である。
- ＪＭＳＣＡ全体の事業をどうしていくのかという議論になる。予定していた事業を見直す必要があるので話し合いの場を持ってはどうか。
- 一律に、ある時期から事業凍結や、支払い凍結は影響も大きく、政策的な要素がかなりある。
- 何をやめるかは、トップリーダーに判断、決めていただきたい。
- 予算書については統一フォームを作成、運用していきたい。

議案第４号　赤字検証委員会メンバーについて

古屋監事が、配布資料を基に以下のように説明した。

今回の赤字検証委員会は、まずＪＭＳＣＡ内部メンバーで、以下の条件を基に、次の候補委員が推薦された。

- 令和４年度事業に関与していないこと
- 公益法人会計に精通していること
- 事業内容に精通していること

候補委員：
ＪＭＳＣＡ参与　内藤　順造様
奈良県山岳連盟会長　藤本　直民様
（一社）三重県山岳・スポーツクライミング連盟会長　加藤正之様
ＪＭＳＣＡ　監事　古屋　壽隆様
ＪＭＳＣＡ　監事　佐久間　務様

上記メンバーについて採決を取り、以下のように承認された（小野寺専務理事、赤尾事務局長は採決から除外）。

反対０名、棄権１名（濱田常務理事）、賛成22名

尚、赤字検証委員会の調査結果に基づき、必要に応じて第三者委員会設立の要否を判断する。調査は慎重に進める必要があり、検証委員会で確認後、皆さんへ調査報告書としてお伝えする。今回の調査対象は、赤字を発生した件の全般的な調査となる。

理事会で発表した内容が、特定岳連に情報が流れており、セキュリティーの問題がある。リスク回避のためにも、意識して漏らさないようにしていただきたいと丸会長が警告した。

議案第５号　補正予算について

濱田常務理事が、資料を基に現状の説明をした。

６月末時点で事業凍結を前提としている。

サマリーとして、当初予算から　１億2700円の収益を削減し、６月以降事業凍結しても3000万円の赤字となる。ＳＣ部だけの削減では不可能なので、以下の活動を提案。

1. ＳＣ部以外の事業の支出削減
2. 博報堂との交渉、議論をはじめる。
3. 収入に見合った規模への縮小（委員会の縮小）

誰が何を行い、その計画に対して監視することが必要。そのため、臨時常務理事会を、８月12日（土）ＰＭ18：00から参加可能な人で開催することになった。小野寺専務理事がZoom案内を送付することになった。

議案第６号　顧問参与について

小野寺専務理事が配布資料を説明し、採決を取り、異議なく承認された。

顧問候補：亀山健太郎氏
反対０名、棄権０名、賛成：全員
参与候補：原秀樹氏、小竹靖高氏
反対０名、棄権０名、賛成：全員
賛助会員候補：亀谷健太郎氏、原秀樹氏、小竹靖高氏
反対０名、棄権０名、賛成：全員

議案第７号　業務委託契約確認について

赤尾事務局長が配布資料を基に概要を、丸会長が本契約に至った背景を説明した後、質疑応答があった。

今後の大会運営において、業務委託契約対象者の大会への関与は、引き続き必要であるとの意見がだされ、以下の５案で賛否を取った。

1. 業務委託を委員長、副委員長から外す。９名
2. 業務委託契約を承認しない。２名
3. 原案通り11名
4. 棄権１名
5. 反対０名、合計23名

過半数にいたらず、以下の２案で改めて採決を取った。

1. 委員長、副委員長からはずす（専門委員、常任委員）	10名
2. 原案通り	12名
3. 棄権	1名
	合計23名

当初の出席人数から、欠席者があり、この時点で過半数は12名となり、原案通りの案が、過半数となり可決した。

議案第８号　ＵＩＡＡ安全委員会委員推薦愛知岳連北村理事会

プロフィール未着なので次回に持ち越し

議案第９号　国体都道府県予選競技会の支援に関する補助金についてのお願い

赤尾事務局長が、配布資料を基に説明した。各岳連、協会から情報収集するねらい。記入時に“対応の候補として、返金したい”を入れてはどうかを挿入するか議論があったがいれないこととなった。

丸会長が詳細確認したいので再確認の上、実名で提出し、本提案内容で提出することの採決をとり、以下のように承認された。

賛成21名、反対０名

議案第10号　金銭消費貸借契約書の内容について

赤尾事務局長が契約書案の内容を説明した。10/31から借り入れ、来年３/31までに返済という内容で、質疑応答があったが、今後の事業をどうするのか明確でなく、事業概要の目途が立っていない中で、決裁をできる状況ではない。２名の監事からも、決裁を行うこと自体適切でないとの意見もあり、当議案を取り下げることになった。

議案第11号　山岳スキー競技国際競技大会派遣日本代表選手・強化指定選手選考規程

平田理事が配布資料を基に説明した。内容は、次期シーズン用のもので文面含めガバナンス委員会によりチェック済となっている。採決の結果、異議なく承認された

反対０名、賛成18名

議案第12号　アジア大陸予選の選考基準、ＷＣ派遣選手（コペル・呉江）の選考基準について

西谷理事が配布資料を基に説明した。

採決の結果、異議なく承認された

反対０名、賛成18名

７．報　告

報告第１号　月次報告について

赤尾事務局長が配布資料を基にキャッシュフローの状況を説明した。資金枯渇前に、支払いをやめる前の１か月くらい前より、事前連絡等が必要になってくる。

報告第２号　役員賠償責任保険、学識経験者正会員会費について

次回に持ち越しとなった。

報告第３号　顧問参与会開催検討について

小野寺専務理事が、毎年１月に行っていた顧問参与会と八木原前会長の叙勲祝賀会を同一日の候補（10／29）に40名くらいで行うことを検討している旨説明した。

報告第４号　ＪＳＰＯ／ＪＭＳＣＡ指導者表彰について

小野寺専務理事が、配布資料を基に各自読むように伝達した。

報告第５号　令和６年（2024年）新潟全日大会の広報について

新潟岳連から160万円を出してほしいと要請されている。開催時期は来年９月を予定。

報告第６号　副会長連絡会議について

丸会長が、配布資料を基に説明した。

スポンサー、自治体ごとに担当者を任命した。アーバンスポーツファンドについての補足説明をおこなった。

報告第７号　各委員会の主管担当理事について

小野寺専務理事が配布資料を基に各自読むように伝達した。

報告第８号

裁定委員会からの調査報告がされ、１名の加害者が認定され常務理事会で、行われ対応についても承認された。

８．その他

対外的に、今後、会長名発信の文章は、自筆でサイン後発送する。例外はあるにしてもそれ以外は、専務理事名で出す。

次回は９月14日の予定。

以　上

令和５年８月10日　　記録　赤尾　浩一

JMSCA

令和５年度 第８回
ハイブリッド理事会報告

○**日　時**：令和５年９月14日（木）
14：14～19：25

○**場　所**：ＪＳＯＳビル３Ｆ会議室１と
Webのハイブリッド会議

○**出席者**：丸会長、蛭田・飛松・吉田・山本各副会長、小野寺専務理事、古賀・濱田・赤尾・町田・栗田・望月・安井各常務理事、佐藤・小日向・前田・水村・野村・小高・中橋・島田・杉本・西谷・畑中・小田部・山口（赤字検証委員会中間報告から第３号議案採決まで参加）・中島（第４号議案から参加）各理事以上27名、古屋、佐久間各監事以上２名

オブザーバー：百瀬競技委員長

○欠　席：樋口理事、平田理事

１．開　会

２．丸会長挨拶

現在、過渡期で、いろいろなところで大きな変更が発生している。例えば、ユースに関する決まりの変化や、中国離れや、トランスジェンダーの流れなどがある。様々な課題があるので、真剣に検討していきたいとともに、ご協力をお願いしたい。

３．会議成立状況報告

理事数　29名中25名出席（開会時）監事数　２名中２名出席（定款第33条、定足数＝13名（１／２超、決議は出席理事の過半数をもって行う）

４．議長選出

丸会長が議長を務める　（定款第32条）。

５．議　題（注. 審議順に記載）

2022年赤字検証委員会中間報告について

内藤委員長が以下のような中間報告をした。今委員会の目的として、令和３，４年度に赤字決算にいたった原因の究明と、赤字が発生したメカニズムを明確にすること、および予算管理の実態を把握し、ガバナンス体制・状況を確認することである。

担当理事、事務局を含め、ヒアリングを行なった結果、組織全体の危機感の欠如、赤字決算分析が不十分、本部の管理不足と情報提供不足といった組織構造上の問題点があると判断している。

また、コンプライアンス上の問題として、決まりを守る意識がない、一部の執行責任者の管理不足がある。コミュニケーションの問題として組織全体にわたる連携不足、情報共有不足による不適切な業務執行もあった。

予算管理の不備として、低い予算精度、補正予算未提出等があげられる。最終報告案を10月理事会に上程予定。

議案第１号　第７回（８月実施）理事会議事録の承認について

質問は特になく、異議なく承認された。

議案第２号　各理事担務／委員会 or 担当について

丸会長が配布資料を基に説明し、パラグライミング室、ＬＧＢＴＱ室、ＪＢＳ室の新設、アイスクライミング委員会、UAAA 30th Anniversary準備室の設置と、担当理事案が提案された。その後、さまざまな意見交換後、今回は、ねらいや経緯の報告までとし、採決は次回に持ち越しとなった。

議案第３号　補正予算について

濱田常務理事が、配布資料を基に説明した。８月末に収集された補正予算をまとめたところ、１億１千万の赤字予算となっている。財源予定額が少なくなったので、それに合わせた事業計画の見直しが必要だが見直しに時間がかかっているうちに運営資金が枯渇する状況になってきている。

赤尾事務局長が、事業の再構築を考慮せざるを得ない状況となったこと、現状の確保可能資金と、そこからの配分案の説明をした。さらに、以下の補足説明をした。

- 銀行追加融資は３,000万円（借入上限１億１千万円まで増枠したうえで）と、６,000万円の篤志家による借入を行なう案がある。
- 11月以降何もしないと事業ができなくなってしまうこと、固定費が払えないことから、６,000万円の借入は延命措置ではあるが、借入せざるを得ないという状況である。
- 基金による資金調達の方法の可能性は、今後も継続して追求する。

その後、以下の２点の採決を取った。

１．みずほ銀行からの３,000万円の追加融資をうけることについて、以下のように異議なく承認された。

反対０名、棄権０名、賛成25名

２．篤志家からの６千万円の借入（融資）について、以下のように承認された。

反対３名、棄権２名、賛成19名

なお、常務理事会で、確保可能資金から固定費を除いた９,500万円を、登山部、ＳＣ部、独立委員会に配分する方向で事業計画を進めることになった旨の説明をした。

議案第４号　ＪＭＳＣＡ金銭消費貸借契約について

小野寺専務理事が、配布資料を基に説明した。前回の理事会で否決されたが、前議案第３号の決定を受けて、具体的な契約案をもとに、さまざまな意見が出たのち、以下の採決を取った。

１．当契約書案（返済期限３月31日）のままでよいかどうかの採決を取り、以下のようになった。

賛成４名、反対14名、棄権６名

過半数13名を超える14名が反対なので、当契約書案は否決された。

２．上記の結果をうけて契約変更案として、第３条の返却期限を３月31日から５月31日に変更することについての採決をとり、賛成16名と過半数をしめた。

この結果、丸会長が、交渉しやすい方法で、必要ならば同行者の要否を検討の上、上記返済期限の変更の交渉を行うこととなった。

追加議案について

１．ＳＣ競技について百瀬競技委員長が４つの提案の後、５案も含めて提案した。

案１　従来と同水準の仕様による見積支出８,000万円

案２　支出７,400万円　委託業務の見直し、参加費値上げ、ＪＭＳＣＡメンバーによる会場設営（事務局男性、役員等）

案３　ＢＪＣの費用を削る（２日目）

会場変更（盛岡など）も検討、１ラウンドのみの開催は選手から反対の声も多く納得しにくい（最低２回は必要）。開催時期を４月初に

移す案もありうるが、ＷＣに間に合わない可能性あり。ＬＪＣ／ＳＪＣ／ＳＹＣを佐賀県で同時開催すれば、佐賀県から400万円補助する案がある。案３は規模縮小のため、ＪＭＳＣＡ持ち出し（負担）金額という意味では、案２とほぼ同じ。

案４　高校選抜、ＢＪＣを中止。

案５　ＢＪＣの実施は判断を保留して、案２の縮小案で高校選抜、ＬＪＣ／ＳＪＣなどを実施

上記案に対する質疑および意見交換の後、案１－４はなくし、案５（12月高校選抜、２月ＬＪＣ／ＳＪＣ／ＳＹＣを開催する）で進めるかどうかを採決し、以下の結果となり進めることになった。

賛成20名、反対０名、棄権３名

強化は、10月以降1,000万円で補助金以外の負担なしを前提に検討するが、詳細は、別途検討する。

議案第５号　公認大会規程について

小野寺専務理事が、岸和田ＣＡＮＣＡＮカップ、神奈川公認大会について、配布資料をもとに説明した。今後、公認の承認は、迅速な対応が求められるので、理事会承認ではなく常務理事会承認としたいと提案した。

併せて、岸和田ＣＡＮＣＡＮカップのメンバーに活動停止者を外す条件で以下のように、異議なく承認された。

反対０名、棄権０名、賛成24名（１名対象外）

議案第６号　共催大会申請について（盛岡、鳥取クライミング体験会）

丸会長が配布資料を基に説明し、異議なく承認された。

反対０名、棄権０名、賛成25名

議案第７号　ＵＩＡＡ安全委員会正規委員推薦について

小野寺専務理事が、配布資料を基に愛知県岳連の北村理事長を推薦し、異議なく承認された。

反対０名、棄権０名、賛成25名

議案第８号　参与の推薦について（相良忠麿氏）

小野寺専務理事が口頭で相良忠麿氏の履歴を説明し、異議なく承認された。

反対０名、棄権０名、賛成25名

議案第９号　報奨金規程について

予算はゼロのため、今年度は支払えないが、来年度以降に支払う前提（時期は未定）で、異議なく承認された。

表彰者

世界選手権１位１名：森秋彩（女子リード）

世界選手権２位１名：安楽宙斗（男子リード）

世界選手権３位２名：楢﨑智亜（男子ボルダー＆リード）、森　秋彩（女子ボルダー＆リード）

総額：160万円

反対０名、棄権０名、賛成25名

議案第10号　ＳＣアジアユース選手権2023選考基準について（10月17日から10月21日）

西谷理事が配布資料をもとに説明した。

選考選手について、上位３名は決まっている。ビザ申請が間に合わなければ補欠選手が繰り上げ推薦される。以下のように異議なく承認された。

反対０名、棄権１名（理事１名が選手のため）賛成24名

６．報　告

報告第１号　月次報告について

小野寺専務理事が、配布資料を見ておくように伝達した。

報告第２号　役員賠償責任保険、学識経験者正会員会費について

学識経験者は、後で請求書を送るので支払う（10/20期限）ように伝達した。

報告第３号　顧問参与会開催について

小野寺専務理事が、10/29（日）に13：00からＪＳＯＳで顧問参与会を実施し、その後、アルカディア市ヶ谷で15：30　から２時間、八木原顧問叙勲祝賀会を実施予定であること、理事の皆さんにはメールで案内を送付することを伝達した。

報告第４号　アジア山岳連盟30年について

丸会長と小野寺専務理事と畑中理事で、新潟に行く予定と伝達した。

報告第５号　スポーツコーディネーター選出について

常務理事会で、百瀬恭平氏が推薦されたことを伝達した。

報告第６号　パリオリンピックチケットについて

丸会長の分は確保した。ほかに必要ならば別途連絡してほしい旨伝達した。

報告第７号　東京開催山の日イベントについて

丸会長が栗田常務理事に加え、島田理事にＪＭＳＣＡ代表として窓口を依頼し、島田理事が了承した。

報告第８号　2023年度残りの競技について

先ほど追加議案で協議した内容のとおり。

報告第11号　ハセツネ後援申請について

小高理事が状況を説明したのち、当件の後援申請承認について、反対（９名）、賛成（９名）、棄権（６名）となり、いずれも過半数とならず、別途、常務理事会に委任されることになった（詳細情報は、登山部で収集する）。

報告第12号　指導者認定について

小野寺専務理事が、常務理事会で配布資料に基づいて承認されたことを報告した。

報告第13号　役員派遣について

海外出張について、会長が、常務理事会で、全部参加不可とのことだったが、必要性を再考し、20万円以内ならＪＭＳＣＡ負担とする案を提案した。基本的に、出張をしていただく場合には、協会で費用負担するが、情報収集の目的ならば、出張は不要。今年度は、支出の大幅な削減が必要なため、オフィシャルでは、海外出張派遣はしない。どうしても、必要ならば、自費負担を基本としてはどうかということになった。

尚、ＪＯＣ ＮＦの役員獲得のための助成対象となるならば、できるだけその助成でカバーしてほしい旨補足された。

７．その他

２つの提案（「山」を起点としたクラウドファンディング実施について、ＪＭＳＣＡフレンド及び「山の日」全国大会in Tokyo 山スタンプラリー）は、各自読んだ前提で、承認された。

以　上

令和５年９月14日　　記録　赤尾　浩一

寄贈図書

（株）山と渓谷社	「ROCK&SNOW」101 autumn issue sept.2023	季　刊
一般社団法人　日本防火・防災協会	「地域防災」2023-8 A UG. No.51	季　刊
株式会社ネイチュアエンタープライズ	「岳人」2023 September No.916	情報誌
公益社団法人日本スポーツ協会	「Sport Japan」vol.69	情報誌
（株）山と渓谷社	「山と渓谷」2023 No.1069	雑　誌
公益財団法人日本武術太極拳連盟	「武術太極拳」2023年９月 No.403	会　報
公益財団法人京都府スポーツ協会	「スポーツ時報」第140号 20239	新　聞
一般社団法人埼玉県山岳・スポーツクライミング協会	「SMSCA news」No.79	会　報
東京野歩路会	「山嶺」Vol.101　No.1123	会　報
公益財団法人日本山岳会	「山」2023年（令和５年）９月号（No.940）	会　報

〈お詫びと訂正〉

先月号Ｐ４の「IFSCクライミングユース世界選手権2023 報告」で誤りがありました。関係者の方々に深くお詫びするとともに、ここに訂正致します。

誤

U20（ジュニア）女子	小倉紗奈	栃木県山岳・スポーツクライミング連盟	３位
	葛生真白	同志社大学県山岳	７位

正

U20（ジュニア）女子	小倉紗奈	同志社大学	３位
	葛生真白	栃木県山岳・スポーツクライミング連盟	７位

8月号より開始！かすみちゃんのハイキング日記」

表紙のことば

安達太良山は、最高峰の箕輪山（1,728m）を含め南北約12kmの連峰です。中腹は樹林帯で覆われていますが、安達太良山頂から鉄山までの稜線は火山活動のために荒涼とした風景になります。中心部には温泉付きの「くろがね小屋」（現在休業中）も有り、通年において親しまれています。

秋は空気も澄み、中腹の樹林帯の紅葉と稜線の展望が楽しめる季節となります。遠くは那須連峰や飯豊連峰、近くは磐梯山やその湖沼群そして沼の平が眼下に広がります。

（福島県山岳・スポーツクライミング連盟
理事　指導委員長　七宮 勝広）

編集後記

今月号から編集を引き継いだ松本光顕と申します。初めての編集経験で、「台割り」、「ゲラ」、「校了」などの専門用語に戸惑いながら、また締め切り日が近づくにつれて原稿を待つドキドキ感を味わっています。毎月これが続くのかと思うと、不安とやる気に満ちた気持ちで一杯です。読者の皆様には温かい目で見守っていただけると幸いです。

また、私的なお知らせですが、6月に長女が生まれました。これまでの山中心の生活から、子育てがメインの生活に変わり、さらに10月からは登山月報も加わり奮闘しています。

（松本光顕）

トレランJAPAN
一般財団法人 日本トレイルランニング協会
〒141-0031
品川区西五反田6-3-23-205
☎03-3492-0355　FAX 03-6451-3767

登山月報　第 655 号
定　価　110 円（送料別）
予約年間　1,300 円（送料共）
（毎月 1 回 15 日発行）
発行日　令和 5 年10月15日
発行者　東京都新宿区霞ヶ丘町 4 番 2 号
Japan Sport Olympic Square 807
公益社団法人
日本山岳・スポーツクライミング協会
電　話　03－5843－1631
F A X　03－5843－1635

山岳雑誌 岳人
山と人、時代をつなぐ「岳人」（がくじん）

11月号 発売中
【特集】熊野古道　熊野三山への参詣道と大峯奥駈道
★モンベルのウェブサイト
全国のモンベルストアや書店にて発売中！
毎月15日発売　価格1,100円(税込)

モンベルクラブ入会キャンペーン実施中！
▶年間購読が断然おトクに！
年間購読通常特典　購読割引　送料無料　限定品プレゼント
さらに　モンベルクラブ会員さまには　モンベルポイント 5,000Pプレゼント！
モンベルクラブ会員さまで現在購読中の方は、次回継続時に5,000Pをプレゼントします。

年間購読特典
岳人コンパクトフォームパッド
手軽に携行できる軽量コンパクトなパッドです。
限定デザイン
岳人カード
全国2,000ヵ所以上でご優待！
全国の温泉や山小屋など提携施設でさまざまなご優待が受けられるカードです。

年間購読のお申し込みはこちらから！
https://www.gakujin.jp/
全国のモンベルストアでも受付中！
お問い合わせ　モンベルポスト
フリーコール 0120-982-682／TEL 06-6538-5797
※フリーコールは携帯・IP電話からはご利用いただけません。

SDGsで、未来をつなぐ

三井住友海上は、安心と安全の提供を通じて、持続可能な社会の実現に取り組みます

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

SDGs（Sustainable Development Goals）とは

2015年の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に掲げられた包括的で持続可能な社会の構築を目指す「持続可能な開発目標」のことです。

持続可能な地球環境	
関連する主なSDGs	主な取組
12 13 14 15	・再生可能エネルギーの普及支援 ・自然災害リスクモデルにもとづくコンサルティング

安心して暮らせる社会	
関連する主なSDGs	主な取組
1 2 3 4 5 6	・健康づくりの支援 ・先進技術を活用した利便性の高いお客さま対応

活力のある経済活動	
関連する主なSDGs	主な取組
7 8 9 10 11	・次世代モビリティ社会への対応（自動運転車等） ・災害に強いまちづくりの支援

立ちどまらない保険。

MS&AD 三井住友海上

三井住友海上は、レジリエントでサステナブルな社会※をめざします。

※外部環境にしなやかに対応する、持続可能な社会

東商アソシエート株式会社　www.climbing-tosho.com　Tosho Associate

JMSCA

登山者のマナー
山岳保険

あなたのは山岳保険ですか？

- □ 傷害死亡・後遺障害
- □ 遭難捜索費用
- □ 救援者費用
- □ 傷害入院
- □ 傷害通院
- □ 傷害手術
- □ 日常生活賠償

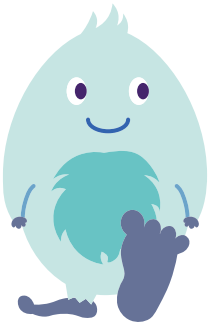
日山協 山岳共済会 〒170-0013東京都豊島区東池袋3-7-11-707

TEL 03-5958-3396 FAX 03-5958-3397

E-mail sangakukyousai@mbd.ocn.ne.jp

月曜日～金曜日 10:00～17:00（祝日除く）

携帯からも資料請求ができます。
https://sangakukyousai.jp



「MAMoL マモル」
山を愛する人たちの共済会を～

WEBからもお申込みいただけます